

(様式第9号)

## 高槻市立第八中学校区運営協議会 会議録

会議の名称	令和7年度 高槻市立第八中学校区 第1回学校運営協議会		
会議の開催日時	令和7年 5月 21日 (水) 18:00~19:15		
会議の開催場所	高槻市立第八中学校 大会議室	公開の可否	可
担当課	教育指導課 教育総務課	傍聴者数	0人
非公開の理由 (非公開(会議の一部非公開を含む)の場合)	・会長、副会長の選出、要綱の確認 (高槻市審議会等の会議の公開に関する指針第5項による)		
出席委員	土井 六三、高橋 園美、竹下 守雄、山脇 和美、 西山 しのぶ、福岡 毅、瀬野 周馬、城下 英行		
事務局出席者	(第八中学校) 松岡、吉田、塩崎、松政、藤本、高谷 (磐手小学校) 堀田、辻岡、山本、鳥野、久保、柳生 (奥坂小学校) 江河、木原、西川、山本、瀬口		
会議の議題	1.会長、副会長について 2.校区経営計画(グランドデザイン)について 3.今後の活動予定について		
配付資料	資料1 学校運営協議会委員名簿 資料2 配席図 資料3 高槻市立学校における学校運営協議会に関する規則 資料4 第八中学校区学校運営協議会の会議の公開に関する要綱 資料5 第八中学校区学校運営協議会傍聴要項 資料6 高槻市地域学校協働活動推進員の委託等に関する要綱 資料7 令和7年度 第八中学校区グランドデザイン(案) 資料8 令和7年度 第八中学校区グランドデザイン地域・保護者用(案) 資料9 第八中学校区各校年間行事予定		
審議等の内容	・会長、副会長の選出 ・学校運営に関する基本的な方針の説明と協議及び承認		

(別紙)

## 高槻市立第八中学校区運営協議会 会議録

開会	委員出席確認 本会議の成立確認 校長 あいさつ 高槻の学校運営協議会の設置等に関する規則の説明
1. 議題 1	会長の選出 土井委員 副会長の選出 城下委員  「学校運営協議会の会議の公開に関する要綱及び学校運営協議会傍聴要領」について 資料 4 資料 5 学校より説明→委員の確認 傍聴希望者の確認→傍聴者なし
2. 議題 2	校区経営計画（第八中学校区ランドデザイン）について 資料 7 資料 8 学校よりランドデザインの説明→質疑応答→委員の承認 質疑応答等
委員	今まで学校単位で教育目標があったが、9年間のプログラムに変わっている。その狙いはどの辺にあるのか。
学校	今回の目標設定は、昨年度も掲載されていた内容を基にしている。コミュニティスクールが4年目を迎え、小学校から中学校までの9年間を一体として捉える視点が必要だと考えた。そのため、学校ごとの目標ではなく、この地域で育つ子どもたちが年齢に応じてできるようになることを目標とすることで、より分かりやすくしたのが今回の変更の狙いだ。
委員	資料 7 と資料 8 の中で、コーディネーターというのがあるが、どういう方々なのかを教えてほしい。
学校	資料 6 に記載がある地域学校協働活動推進員の方のことで、コミュニティスクールを地域とともに広めていく推進者として、人と人をつなぐコーディネーターとして活躍いただいている設置中学校区で1名が担う。
委員	今回の資料について、全体的に見やすく統一感がある。「自立・共生・

	<p>チャレンジ」という目標から重点目標までが一貫しており、内容が理解しやすい。一方で、資料8の項目について、句読点の使い方が分かりづらい。改行や読点を使用するなど、より見やすい工夫を検討してほしい。また、昨年の学校運営協議会で、子どもたちの自己評価が低い傾向にあった。特に「自分の存在が人の役に立っている」「自分は大切な存在」といった質問への肯定的な回答が少なかった。これは学校目標の「自立・共生・チャレンジ」にも関わる重要な点だ。子どもたちは他者の良い点は認められるが、自分の良い点を認識する機会が不足している。お互いの良い点を認め合う経験を通して、自己肯定感を育む必要がある。学校教育だけでなく、地域の活動を通して子どもたちの自己肯定感や自己有用感を高める必要がある。例えば、「ふるさとふれあいフェスティバル」への中学生ボランティア参加は、地域とのつながりを生み、地域を好きになるきっかけにもなる。地域行事の中で小学生にできることを体験させるのも重要だ。自己肯定感や自己有用感を育む活動を、教育と地域が連携して進めていければよい。</p>
委員	<p>経営目標の3つの区分の「小学5年生から中学1年生」で「地域の一員として参画する」という項目があるが、小学校5・6年生の地域の一員としての参画にどのようなイメージを持っているのか知りたい。</p>
学校	<p>9年間の中で、小学生と中学生という分け方ではなく、発達段階に応じてできることは変わると考えている。小学校の卒業式で、6年生の力やそれを支える5年生の姿に感銘を受けた経験がある。中学1年生になったからといってすぐに大人として活躍するわけではなく、段階的にできることが少しずつ増えていく。低学年や中学年は支えられながら学び、5・6年生は中学1年生に向けて自分にできることを増やしていくステップだと捉えている。この考え方は、高槻市の教育努力目標における子どもたちの成長を促す区分に準じており、地域の子どもたちも同様に成長していくには、このくくりの中で地域で担える力を育む必要があるという視点から、この形での目標設定に至っている。</p>
学校	<p>小学校が「地域の一員として参画する」という点で印象的だったのは、昨年度のクリーンキャンペーンへの参加だ。子どもたちが自ら考えて行動に移した活動は非常に有意義だった。また、ふるさとふれあいフェスティバルに小学校の3年生が参加したことも貴重な経験だった。子どもたちは、地域のお祭りを盛り上げる人々に出会い、将来自分も地域に貢献したいという憧れを抱く貴重な場となっている。</p>
委員	<p>教育目標の「ふるさとを愛し」というところだが、都会において地元を</p>

	<p>愛し心を尽くすのは、今の時代になかなか難しいように思う。その中でふるさとを愛する子どもたちを育てるには、地域の中でどうすればいいかを考えていきたい。</p>
学校	<p>コミュニティスクールやチームエイターの導入により、地域住民が学校の教育課程に深く関わる機会が増えた。これは、子どもたちが学校の学びの中で地域とつながる大きなチャンスとなっている。特に、地域の人々との密接な関係は「ふるさと感」を育む上で重要だ。多くのチームエイターと関わることで、近所の人々との顔見知りになり、地域での声かけなどが増える可能性がある。このような交流は、子どもたちが地元やふるさとに対する愛着を深めることにつながる。</p>
委員	<p>チームエイターの取り組みについてももう少し詳しく、現状を知りたい。</p>
学校	<p>小学校ではチームエイターが日常的に学校を訪れ、教員をサポートしている。新年度には、1年生の登校サポートや給食開始までの見守りなど、特に人手を要する場面で活躍している。校外学習での安全見守りや、家庭科の調理実習、習字、アサガオの種まきといった教師一人では手が回りにくい教育活動において、子どもたちに寄り添ったサポートを提供している。また、子どもたちは先生には相談しにくいこともチームエイターに話すことがある。八中校区で防災学習に取り組む際には、地域の探検に同行し、昔から地域に住む委員が地域の歴史を子どもたちに直接伝えている。このように、地域を実際に歩いて知り、地域の人々の話を聞く経験は、ふるさとへの愛着を育む上で非常に重要であり、チームエイターの関わりは大変ありがたい。</p>
学校	<p>限られた教員数で大勢の子どもたちを引率する際の、大人数の不足が大きな課題となっている。例えば、先日実施した2年生の校区探検では、担任3人で約100人の子どもたちを引率するにあたり、保護者へ協力を呼びかけたところ、約10名が集まり、交通見守りなどのサポートを得られたことに感謝している。また、学校林へ行く際も保護者や維持管理を担うエイターの協力を得ており、エイターから学校林の歴史などを直接聞く機会も設けられている。このように、生まれも育ちも磐手校区であるエイターから地域の歴史を直接聞くことで、子どもたちは自分が住む地域の歴史を学び、その土地に根ざした理解を深めることができると考えている。</p>
学校	<p>中学校では、専門性を持ったチームエイターの参加が非常に成果を高めている。特に部活動においては、顧問教員に専門性があるとは限らない</p>

	<p>現状で、地域の人材がコーチとして指導に加わることで、生徒への技術指導が丁寧に行き届き、教員側の安心感も大きい。また、中間テスト前に行われる放課後学習会では、元大学教授や高校教員といった引退した専門家が「教えるのが好き」という理由で参加し、英語などの学習指導が充実している。生徒からは「よく分かった」という声が多く、チームエイター自身も「元気をもらえる」と語っており、生徒だけでなく参加者自身の郷土愛も深まるきっかけとなっている。昨年度は家庭科で着付け教室を実施し、20人近くの着付け専門家が授業に参加。生徒全員が着物を着用し、日本の伝統に触れる貴重な機会となった。この素晴らしい授業は今年度も継続して取り組む予定だ。</p>
委員	<p>長く関わってきた中で、いろいろわかりやすくなってきたと感じる。</p>
委員	<p>何より子どもたちの元気な顔が見られて、親しんでもらえるというのが一番嬉しい。長い年月関わることで、じかに子どもの成長を見ることができる。チームエイター活動は、子どもたちとの交流や運動を通じて自身の健康維持にもつながる。家にこもらずに活動することで、個人の健康増進にも貢献する。このメリットをさらにアピールし、公民館の高齢者向け教室やコミュニティセンター利用者説明会などで、チラシ配布や申込書受付を行うことで、新たな参加者を募ることができる。これにより、学校側も参加者の安全性を把握しやすくなる。また、今回の重点取り組みの方針については、基本的にはこのままで良いと考えている。具体的な内容は、今後の実践を通じて作り上げていけばよい。</p> <p>また、質問だが、小学校で昔行われていた「きょうだい学級」のような高学年と低学年の交流制度が現在も残っているか、残っているとすればどのような効果や成果があるかを教えてほしい。</p>
学校	<p>小学校ではペア交流活動が継続されている。レクリエーション活動だけでなく、お互いの授業を参観し合うことで、話し方や聞き方など、授業を受ける上での良いモデルになっている。また、総合的な学習で調べた内容を保護者発表の前にペア学年の子どもたちに発表する機会も設けている。</p>
学校	<p>同様にペア学年制度を導入している。特に1年生と6年生のペアでは、6年生が1年生に掃除の仕方（ほうきの持ち方、掃き方など）や給食の配膳方法を教えるなど、日常生活のサポートを行っている。これにより、1年生と6年生の間に良好な関係が築かれ始めている。</p>
委員	<p>ペア交流活動で効果が出ていることから、小学校4～6年生と中学校1</p>

	<p>～3年生と一緒にペア交流をする「きょうだい学級」のような取り組みを提案したい。防災や減災、交流会などでグループワークを行うことで、学年が上がるにつれてつながりが深まり、絆づくりにつながるはずだ。さらに、幼稚園から大学までを巻き込み、例えば防災をテーマに異年齢のグループワークを重ねれば、縦のつながりや地域の広がりも期待できる。課題は多いだろうが、このような取り組みも検討してほしい。</p>
<p>学校</p>	<p>9年間を一つのまとまりとして、段階的に成長できるよう教育課程を整理している。小学校同士の連携や小学校と中学校の連携を構築しながら、どこかの機会に異学年交流の場を設けることは可能だろう。しかし、小学校のきょうだい学年のように日常的に行うとなると、学ぶべき内容も多いため、全てを網羅するのは難しい。どのような形で実現できるかは今後検討していく必要がある。</p>
<p>委員</p>	<p>来年度、磐手小学校が150周年、奥坂小学校が50周年、八中が55周年を迎えるにあたり、「地域とのつながりを感じる」という重点取り組みの一環として、校区全体で記念の展示や講演を企画できないかという提案がある。例えば、奥坂小学校の記念式典に合わせて市の文化財担当者と連携し、地域の文化財や歴史に関する展示を行う。これは、移動展示館のような形で、3年前に高槻小学校が150周年を迎えた際に教育委員会の文化財担当者が協力した事例があるように、実現可能だと考える。さらに、教育委員会の学芸員による出前講座を実施すれば、講師費用をかけずに地域の歴史を学ぶ機会を提供できる。こうした取り組みを通じて、子どもたちが郷土を知り、愛着を深めるきっかけとなり、将来的に考古学の道に進むようなきっかけにもなりうる。地域全体がまとまりを強めるためにも、今後の展開の中で検討してほしい。</p>
<p>委員</p>	<p>このグランドデザインは、小学校1年生から中学校3年生までの成長をイメージすると、小中のコミュニティスクールのダイナミックさを感じる。高校生の成長も著しいが、小中学生の成長は特に目覚ましいものがある。高槻北は坂の頂点に位置し、生徒のほとんどが自転車で登校してくる。地域の方々に見守られながら生徒たちが学校へ通っていることに、感動を覚える。高校として、地域に見守られながら存在していることを強く実感している。登下校時の挨拶や、生徒が何か問題を起こした際に注意してくれたり、良い行動を報告してくれたりすることで、生徒たちは日々の登校の中で地域の愛情を感じている。入学から卒業までの間に、地域の方々の支えを受けて、「高槻北のこの校区は良いな」と感じながら成長している。今後も、地域のお祭りや挨拶運動などを通じて、生徒たちが地域で様々な経験を積み、成長していけるよう、積極的</p>

	に協力していきたい。
委員	経営目標は、それぞれ「自立・共生・チャレンジ」に対応している。特に「チャレンジ」の「地域総がかり」という言葉は重要だが、どの目標にも地域が協力していることがよく分かるため、経営目標全体が「地域総がかり」で達成されることを、もっと効果的に伝える方法はないかと検討している。これは重要なキーワードであり、うまく伝わるように工夫が必要だ。
学校	今後、検討する。
委員	先ほどの「小学生のボランティア」という話にとっても共感した。小学生がボランティアとして活動できる場は意外と少ない。団体に所属していなければ募金活動なども難しいのが現状だ。しかし、八中校区には「ふれあいフェス」のような行事があるため、学校運営協議会の皆さんと連携し、小学生も地域の行事にボランティアとして関われる仕組みができたら良いと考えている。そうした経験を通じて、子どもたちは地域とのつながりや、地域を大切に思う気持ちを育んでいくはずだ。今後、ぜひ一緒に取り組んでいきたい。
3. 議題 3	今後の活動予定について 次回の連絡
4. 閉会	学校より閉会における謝辞